

しゅしゅしゅ
ヤマダでしゅっ



ひょうごけんきたはりまけんみんきょく
兵庫県北播磨県民局

ひと しぜん いき きたはりま
ここは、人と自然が息づく北播磨
ある日、こうじとみのりは家の倉庫で小さなひかりを見つけました。

やま だにしき ようせい
「ボクは山田錦の妖精 ヤマダ
ボクのふるさとを探してしましゅ」

ふたり いっしょ
そこで二人は、一緒にヤマダのふるさとを
探してあげることにしました。



さが てつだ い ふたり やま だにしき し
ふるさと探しを手伝うと言っても、二人は山田錦のことを知り
ません。

おも だ やま だにしき
「ふるさとのことは思い出せないけれど、山田錦のことはボクに
任せろしゅ！」

い の ます ふたり の と あ
そう言うとヤマダは、乗っていた升に二人を乗せて飛び上がり
ました。



「日本酒がお米と水で造られているのは知っていましゅか？」
「え、お米？」
「みのり、お米大好き！」

「食べるお米じゃなくて、日本酒を作るためのお米を酒米
というんでしゅ。中でも山田錦は酒米の王様といわれて
いるんでしゅよ」

「すごーい！ヤマダは王様なんだ！」
「もしかしたら、ヤマダはお城から
やってきたのかもしれないね！」



つぎ さかまい しけんち
次にやってきたのは、酒米試験地と
さかまい さいばい けんきゅう にほん ゆいいつ
いう酒米の栽培を研究する日本で唯一
しせつ
の施設です。

だれ
「あ、あそこに誰がいるぞ!!」

さかまい しけんち しょだいしゅにん ふじかわ ていじ
「あれは酒米試験地の初代主任の藤川 禎次さん
でしゅよ」

こま
「あれ?でもなんだか困ってるみたい……」



「ううむ……」

なに
「いったい何をどうすればよいのやら」

ふじかわ さかまい かん しりょう な じょうたい
「藤川さんは酒米に関する資料が無い状態でも、
ねば づよ けんきゅう と く やまだにしき たん
粘り強く研究に取り組み、ついには山田錦を誕
じょう
生させたんでしゅよ」

ふじかわ
「じゃあ藤川さんがヤマダにとって、お父さんなん
だね!」





やまだにしき そだ めぐ かんきょう ひつよう
「山田錦が育つには、恵まれた環境が必要になりましゅ」

「どこでもいってわけじゃないんだね」

「そうでしゅ！特に北播磨がぴったりの環境だといわれてい
ましゅ」

み にい た みどりいろ
「見て、お兄ちゃん！田んぼでは緑色
いね きも ゆ
の稲が気持ちよさそうに揺れてるよ」

ほんとう
「本当だ！」

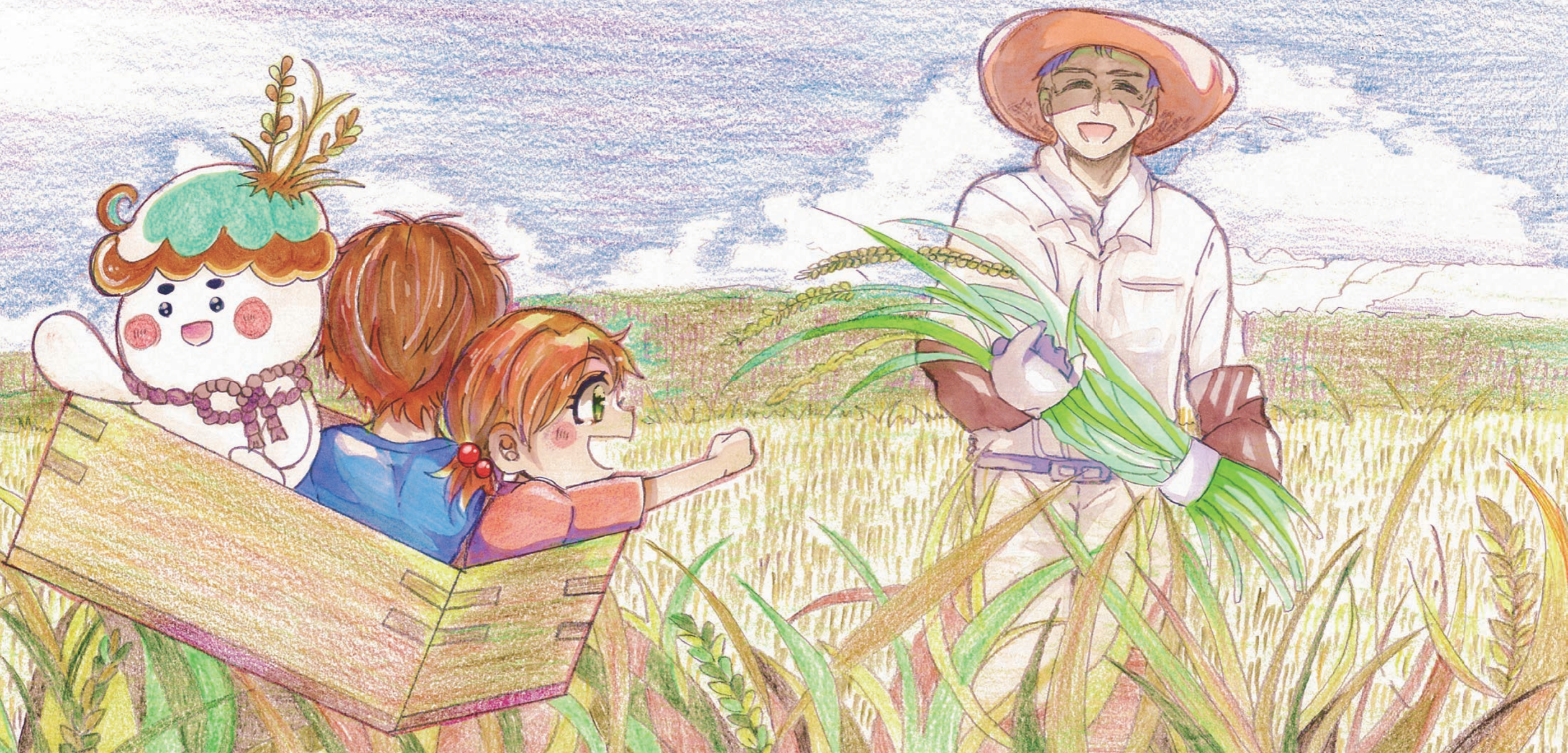


「わあ！きれい！」

「あれは何なにをしているの？」

「山田錦やまだにしきを収穫しゅうかくしているんでしゅよ。

田んぼたが金色きんいろに輝きかがやだせば、収穫しゅうかくの時期じきでしゅ！」



つぎ やまだにしき さけ
次はいよいよ、山田錦がお酒になるところです。

よ さけ なかま りよう こうじづく たいせつ
「良いお酒は、カビの仲間を利用した麴作りが大切なんですしゅ。
やまだにしき こうじ
山田錦はいい麴ができると言われているんですしゅよ」

「えへへ、なんだか照れるなあ」
「こうじってお兄ちゃんのこと
じゃないよ？」
「う、うるさいなあ！！」

さけ の
「あーあ、みのりたちもお酒が飲めたらなあ」
おとな
「大人になるのがたのしみだね」

い かお み あ
そう言うと、こうじとみのりは顔を見合わせて
わら あ
にっこり笑い合いました。



ふた じょうくう もど 再び上空に戻ると、こうじとみのりはた いろ 田んぼに色とりどりの
のぼり ばた た 旗が立てられていることに気がつきました。

「ねえ、ヤマダ！あれはなに？」

やま だ に し き そ だ じ き 山田錦を育てる時期になると、た しゅ ぞ う が い し ゃ 田んぼに酒造会社の

な ま え か は た た 名前が書かれた旗が立つのでしゅよ。

は た い な ほ あ い だ よ う す き た は り ま ち い き ど く と く 旗が稲穂の間をはためく様子は、北播磨地域の独特の
ふう け い 風景となっていましゅ」



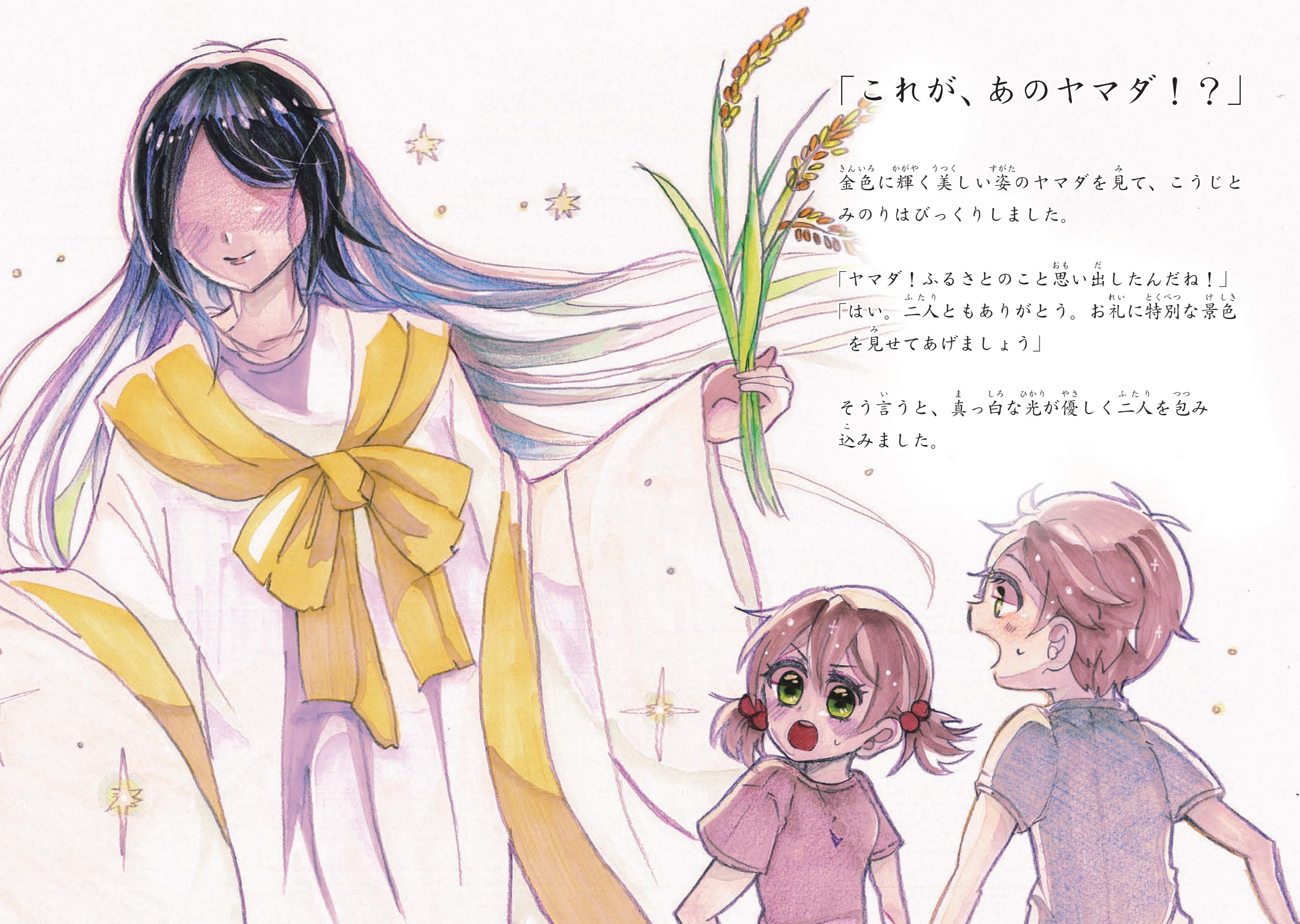
「あれ？さっき見た酒米試験地も見えるよ」

ほん とう 「本当だ！」

「そうでしゅっ！！やっと思い出しました！」

「ボクのふるさととは、ここ北播磨でしゅ！」

すると、ヤマダの体が光とともに大きくなって
いき ました。



「これが、あのヤマダ!？」

金色きんいろに輝く美しい姿かがやのヤマダうつくを見て、こうじとみすがたのりはびっくりしました。

「ヤマダ!ふるさとのこと思い出したんだね!」

「はい。二人ふたりともありがとう。お礼れいに特別な景色とくべつを見せてあげましょう」

そう言ういと、真っ白ましろな光ひかりが優しく二人ふたりを包みこつみました。

「あ！外国の人が日本酒を飲んでるよ！」

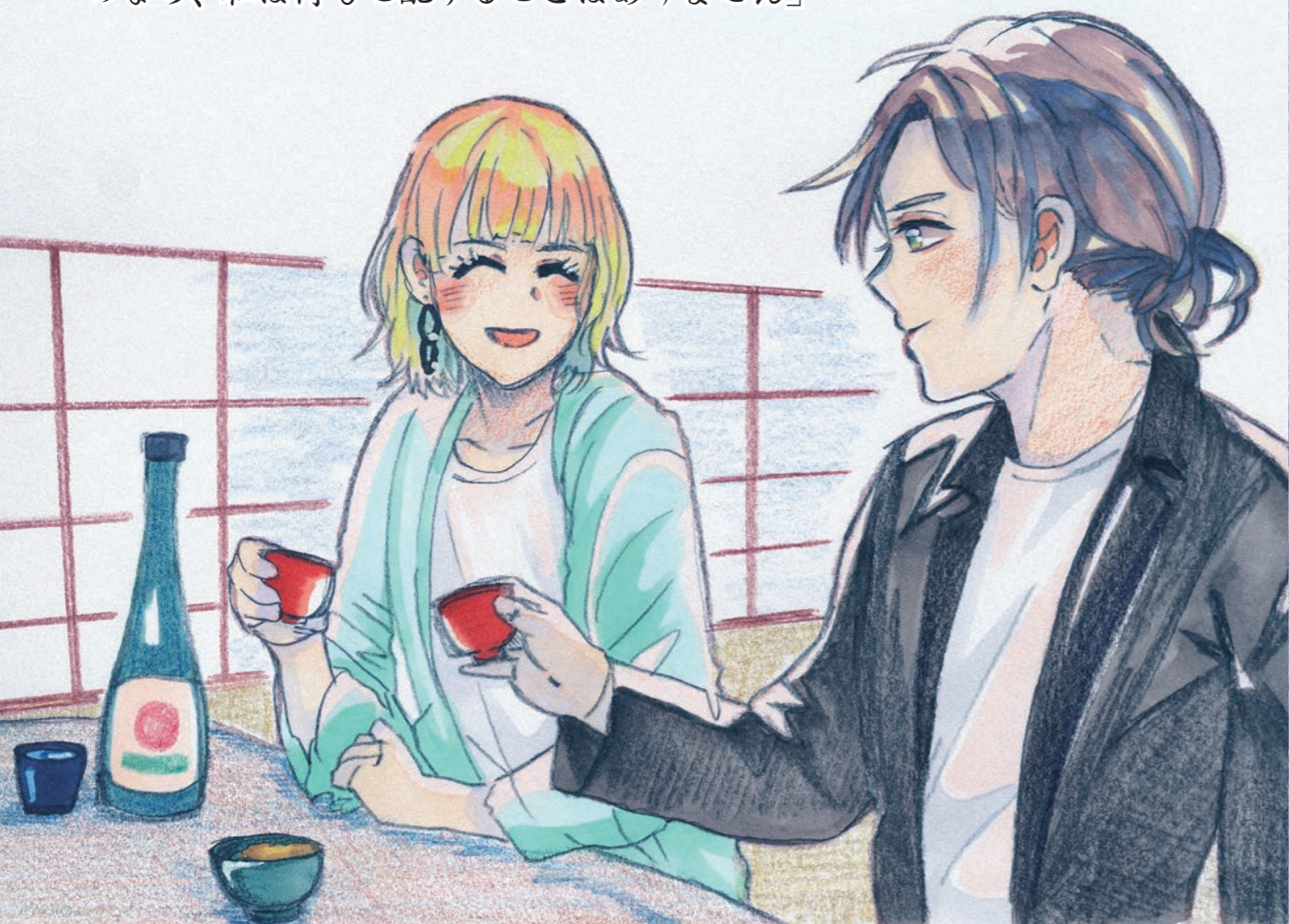
「本当だ！山田錦のお酒かな？」

「その通りです。日本酒の美味しさは、世界にも伝わりつつあります。ですが、おいしい日本酒の原料が山田錦であることはまだまだ知られていません」

「そっか。僕、世界中の人に、北播磨の山田錦を知って欲しいな」

「みのりたちで、みんなにたくさん山田錦のこと教えてあげようよ！」

「二人が山田錦を未来へとつないでくれるのなら、私は何も心配することはありません」



「そろそろ、お別れの時間です」

「ヤマダ……！！消えないで！」

「消えたりなんかしませんよ。」

ふるさとを思い出した今、この豊かな自然と一体となり、より良い山田錦を作る手助けをします」

「僕たち、ヤマダのこと絶対に忘れないよ！」

「大人になったら、今度は3人で一緒にお酒飲もうね！」

「ありがとう。私はいつも二人のそばにいますよ」

